

2020年横浜ナザレン教会降誕節第五主日礼拝
「とこしえの喜び」詩篇5・ルカによる福音書 12:13～21

【聖書テキスト】

ルカ福音書 12:13 群衆の一人が言った。「先生、わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください。」14 イエスはその人に言われた。「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。」15 そして、一同に言われた。「どんな食欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど物を持っていたても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」16 それから、イエスはたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作だった。17 金持ちは、『どうしよう。作物をしまっておく場所がない』と思い巡らしたが、18 やがて言った。『こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、19 こう自分に言ってやるのだ。『さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ』と。』20 しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』と言われた。21 自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」

詩篇5

指揮者によって。笛に合わせて。

賛歌。ダビデの詩。

2 主よ、わたしの言葉に耳を傾け、
つぶやきを聞き分けてください。

3 わたしの王、わたしの神よ
助けを求めて叫ぶ声を聴いてください。

あなたに向かって祈ります。

4 主よ、朝ごとに、わたしの声を聞いてください。
朝ごとに、わたしは御前に訴え出て
あなたを仰ぎ望みます。

5 あなたは、決して
逆らう者を喜ぶ神ではありません。

悪人は御もとに宿ることを許されず

6 誇り高い者は御目に向かって立つことができず
悪を行う者はすべて憎まれます。

7 主よ、あなたは偽って語る者を滅ぼし、
流血の罪を犯す者、欺く者を厭われます。

8 しかしわたしは、深い慈しみを頂いて
あなたの家に入り、聖なる宮に向かってひれ伏し、
あなたを畏れ敬います。

9 主よ、恵みの御業のうちにわたしを導き、
まっすぐにあなたの道を歩ませてください。

わたしを陥れようとする者がいます。

10 彼らの口は正しいことを語らず、舌は滑らかで
喉は開いた墓、腹は滅びの淵。

11 神よ、彼らを罪に定め
そのたくらみのゆえに打ち倒してください。
彼らは背きに背きを重ねる反逆の者。
彼らを追い落としてください。

12 あなたを避けどころとする者は皆、喜び祝い
とこしえに喜び歌います。
御名を愛する者はあなたに守られ
あなたによって喜び誇ります。

13 主よ、あなたは従う人を祝福し
御旨のままに、盾となってお守りくださいます。

1 説教者リトリート

先週は静岡県裾野市にある不二聖心黙想の家で月曜日から木曜日まで開催されていた説教者リトリートに参加してきました。「リトリート」…聞きなれない言葉だと思います。「一時退却」という意味があります。主イエスの日々は、押し寄せる大群衆に説教したり、病を癒したり、方々の町々を巡り歩いたり…と心を注ぎだして精力的に神の国を宣べ伝えておられました。福音書は、そんな慌ただしい日々の中で、主は度々「退いて祈っておられた」と語っています。この主イエスのお姿に倣い、慌ただしい教会の現場、生活の現場から一時的に退却し、祈りに没頭し聖書のみ言葉を集中的に黙想して過ごす、それが「リトリート」です。

教会の現場から離れて、修道院で祈りと御言葉に没頭する…というと、のんびりとした数日間だと思われるかもしれませんが、しかし、案外ちがうのです。祈りに没頭できない自分、み言葉に集中できない自分との戦いがあります。また、神からの鋭い問いかけも受けます。「お前は本当にそれでいいのか」と。

そういう問いかけを受けて葛藤しつつ、ひたすら神に向かい聖書の言葉に向かう時を通して、自分が新しく造り変えられることを経験します。そして、やはり、自分の力だけでは自分を変えられはしない、神さまに取り扱っていただかなくてはならない、私達の命は、神のものだ…そんな確信を得て帰ってきました。

2 二種類の人

さて、先ほどお読みしましたルカによる福音書と詩篇5編。二種類の人が出て来ます。ルカによる福音書でイエス様が話されたたとえ話に出て来る金持ちの男と、詩篇5を詠った詩人。ルカによる福音書の譬え話の金持ちは、自分の命は自分のものだと思っています。一方、詩編5の詩人は、自分の命は、自分のものであると同時に、神のものでもあると考えています。言い方を変えれば、神とは無関係に生きているか、神と深く関わりをもって生きているか…の二種類の人間が描かれています。

3 人と相対する神

詩篇5の詩人は苦しみの中にあるようです。呟いており、助けを求めて叫んでいます。誰に対してでしょうか？天地万物を造り、そして自分の命を造った造り主なる神に向かって。天地万物を造った全知全能の神、しかし、このお方は無機的な、人間とは関わりを持たない方ではありません。被造物である私達人間と向き合ってください方、お付き合いください方なのです。深い苦しみ、悩みの中にある詩篇5の作者は、この神に向かって、助けを求め叫びをあげています。自分を苦しめる者、悩ませる者からの救出を祈っています。

詩人を苦しめる者がどのような者かは、具体的な事は分かりません。ただ分かっている事は、6節、7節。6節の「誇り高い者」というのは、別の訳では、「傲慢な者」、神の御前にさえ高ぶる者という意味があります。そして7節、「偽って語る者、流血の罪を犯す者、欺く者」とあります。裁きの場所で偽証する事が暗示されます。偽りを語り、相手を不当に訴え、人をだまし、詩編5の作者を窮地に追い詰めているようです。

4 深い慈しみを頂く

しかし、この詩人は、自分で自分の敵に報復しません。詩人自身は、まずどうするのか、8節です。「しかしわたしは、深い慈しみを頂いて、あなたの家に入り、聖なる宮に向かってひれ伏し、あなたを畏れ敬います。」神の御前に出て礼拝し、神の御心を知ろうとするのです。その前に詩人は言います。「深

い慈しみを頂いて」と。「慈しみ」とある言葉、原文のヘブライ語では、「ヘセド」という単語、旧約聖書では、「恵み」や「慈しみ」と訳されることが多いのですが、また「誠実」という意味で使われていることもある言葉であり、神と神により頼んで生きる人を描く時に使われている重要な単語です。

私達人間が、天地を造られた神のみ前に出ることができる、そのことじたい、決して当たり前の事ではない、神の深くて大きい慈しみ、一方的な恵み、神の誠実がなければできない事だとこの詩人は知っているのです。だからこそ、この重要な言葉を用いて語っているのでしょう。それは、この詩人が、神を知っている、そして本当の自分の姿を知っているという事なのだと思います。

5 私たち人間の本当の姿

本当の自分の姿というのは、私たち人間の視点だけでは分かるものではありません。私達が今いる場所ー横浜市西区霞ヶ丘がどのような地形のどの地点にあるのか、地上にいては分からない、しかし、上空から眺めれば、「ああ、東京湾の一部の横浜港からせり上がった丘の中腹に今自分はいる」と分かります。それと同じように自分という存在も、自分よりも高い視点から眺めねば、全体像をつかむことはできません。つまり、人間を造った創造者の視点からでなければ、人間の本当の姿を知る事はできないのです。

神から見れば私達はどのような存在なのかを描いているのが聖書と言えます。聖書は、神と私たち人間の関係を描いている、神と私たち人間の物語です。神から見た私たち人間は、どうしても自己中心的な存在だと言わざるを得ません。私たちは、誰も一人で生きてはいけないのに、他の人とすべてを分かり合う事はできないし、いつも大切に思い合い愛しあえるわけでもありません。自分に不都合な存在は、肉親でさえも「いなくなればいいのになあ」と思ってしまうような者達。互いに相手を貶めたり嘘をついたりさえする事もあります。自分の価値観で相手を裁く事もあります。自分の正義を振りかざすのです。そんな私達が造り上げた社会は、人の命を判断する社会。自分達の正義や自分達の利益に都合のよい人々をもてはやし、そうでない人々は無視したり貶めて圧迫する息苦しい社会。まるで私たちは神にでもなったようです。そう、私たちは、自分達で自分達の神になりたがる存在。みな、身に覚えのある事ではないでしょうか。

6 聖なるかな

しかし、聖書によれば、「神」とは、人間がなれる存在ではありません。人間がなれるのであれば、それは本当の神ではないのです。神は無から有を

造り出す事がおできになります、人間にはできません。神は、時間を超えた永遠のお方ですが、人間は時間の中を生きざるを得ない存在です。肉体の命が尽きれば、塵と帰る儚いもの。神は完全な正義であり間違える事はできませんが、私たち人間は過ちを犯します。ですから神と人間はまったく別もの、別次元の存在です。

私たち人間は、別次元の存在である神の御前に入る時、畏れを感じずにはいられないのです。正体の知れない者、得体の知れない者、しかも、それが自分を滅ぼす力を持つ者であればなおさら、恐れ戦かすにはいられません。礼拝の冒頭で「聖なるかな、聖なるかな」と歌いました。それはこのように、全てを超えて存在する、人間とは全く次元の異なる超越的神の存在、その聖さに触れた時、人間である自分の滅びを予感して恐れおののき詠った歌です。「聖なるかな、聖なるかな」、私達被造物は、あなたの御前に入る事ができるような者ではありません。自己中心的に生きている私たちが、あなたのみ前に出れば、私たちは滅びるしかないような者達。あなたは私達とは全く異なる聖なるお方ですから…そういう意味があります。

そんな聖なる神の御前に、穢れ多き私達被造物が出る事ができるのは、ひたすらに神の側からの一方的な恵みであり、慈しみがあるから、聖なる方にして誠実なる御神…と詩篇5の詩人はその事を深く弁え、感謝しています。賛美しています。喜んでいます。

7 金持ちの男

一方の豊かな男はそうではありません。彼の思いの中に神はいません。彼の中に神が占める場所は皆無。豊作の収穫を神に感謝する事もなく、どのようにしてその収穫を自分の手中に蓄えておくかに心をいっばいにします。そして倉を壊して新しい倉を建てる事を思いつき、バラ色の未来を描いて喜び踊ります。彼の中には、神だけでなく、他の人間をも登場しません。自分だけの楽しみ、自分だけの喜びです。そんな彼は、神から見れば、「愚か」としかいいようがないのです。彼は自分の未来を、自分の力だけで切り開けると思っている、だけれども、「お前の未来にとっての肝心かなめの命は、お前のものではないのだ。お前が心血注いでため込んだものを楽しむのも、喜ぶのもお前ではない。お前の命は今晚取り去られ、お前は明日の朝の光を見ることはできないのだから。」神は、この豊かな男に、彼の本当の姿を突きつけます。

誰もこの金持ちを笑える人はいません。生きている間、自己中心的に生き、自分を神として生きる、自分の利益となることに情熱を傾ける。だがしかし、命の間際に気づかされる。自分は死すべき者、滅びゆく者に過ぎない。遺された時間はほんの僅か、今まで自分は何をしてきたのか、自分の命の

意味はいったいどこにあるのか…と。なんということかと思います。神から見れば、私達人間ほど惨めな者はいない、物事の道理をわきまえていない混乱した存在はいないでしょう。

8 神の慟哭

しかし、このような儚く生き滅んでいく人間に対して、最も痛烈な思いを抱いたのは、滅びの当事者である私達ではありません。何よりも私達が神を知らぬまま滅び去る事に心を痛め苦しんでいるお方は、誰だろう神である…と聖書は語ります。聖書のエゼキエル書という書物には、「あなた方は滅んでいいだろうか」という神の慟哭、深い嘆きが書き記されています。

神は正義の方、人間とは異なる聖なるお方ですから、お互いに裁きあい憎み合い嫉み合う人間を無条件で赦し御許に引き寄せる事はできません。「あなたは肉体の命が尽きれば塵に帰り滅び去るしかない、なんということか！私は深く嘆いてる」。神はご自身のこの私たち人間への熱い想いを、預言者に伝え、広く人々に語らせてきました。何度も何度も。

不思議な事です。神は、全知全能の神です。私達人間を強制的にご自身のロボットのようにする事などいともたやすくできるでしょう。しかし、まことの神さま、聖なる聖なるお方は、私達人間一人一人を、ご自身と向き合う事ができる一つの存在とし尊んでくださっている、私達が自由な意思を持つ存在として認めて下さっています。私達を力づくで洗脳などなさらないのです。そこに神の「誠実」が現れています。だからこそ、私達人間が神の御心を見せずして虚しく滅んでいく様をみて苦しく悲しく痛みにお思いになりました。

そこでついに、御子イエス・キリストを私達と全く同じ人間としてこの地上に遣わしたのです。なんのために？私達人間が負うべき滅びを、死を、イエス様に負わせるためでした。それは、悲惨で惨めな死です。生きている間に得た全てのものを奪い去られ滅んで行ってしまう惨めさ、生きている間に結んだ人間同士の深い関係からも切り離され、孤独に滅んでいくしかない悲惨さ、神に見放された徹底的な滅びです。私たちすべてが迎えねばならないそんな悲惨な死を、神の御子イエス・キリストが一身に負われたのです。なんの罪もない、謙虚で知恵にあふれた御子イエス・キリストが、傲慢で愚かな生の結末である人間の死を死んでくださいました。なんという神のお優しさか、私達と同じ苦しみを御子に負わせるとは！だから、私達は勇気を得て御子イエスの後に続き、雄々しく滅んでいこう！神が滅んでくれたのだから！神はそのために、私たちが神の愛に気づいて幸せな気持ちで滅んでいける為に御子をこの地上に送り私たちの死を死なせたのでしょうか。いえ…そうではありません。

9 復活

天の御神は、聖なる聖なるお方は、このキリストを三日後に永遠の命へと甦らされたのです。イエス・キリストの悲惨な十字架の死から三日後に甦った主イエスと出会った者は言います。「死は命へと呑み込まれた」と。御子イエス・キリストは、以前と同じ体に甦られたではありません。主の復活は蘇生とは違います。ゾンビでもありません。甦りの御子イエスがまとしておられた肉体は、十字架に滅ぼされた私達人間と同じく滅びゆく肉体ではないのです。そうではなくて、滅びる事のない永遠の命へと生まれ変わってくださったのです。このように天の御神は、御子イエス・キリストを永遠の命へ生まれ変わらせる事により滅びゆく惨めな私達人間が永遠の命に生きる道を開いてくださいました。

10 ナザレン会のマタイ受難曲アリアを歌う会

さて、「ナザレン友の会」の方々が五月にマタイ受難曲の中から独奏曲を集めてアリアを歌う会を、横浜ナザレン教会の礼拝堂で開催する計画があるそうで、そのちらしをT兄がつくってくださいました。曇り空の中に立つ十字架が描かれた重厚で素晴らしいちらしです。集会室の机の上にありますから、皆さん、礼拝が終わったら是非ご覧ください。このちらし案を見たナザレン友の会の中で「磔刑に苦しみ悩むイエスの姿が描かれた十字架の方が、マタイ受難曲にはふさわしいのではないか」という意見が出ました。確かに十字架の上に苦しみ悩む主イエス・キリストを描いた絵は多数あります。そういった絵のほうが、主イエスのご受難を想起するにはいいのかもしれません。

しかし、それだけでは、主イエスの十字架の本当の意味を伝える事にはならないのです。「なんというお優しい方だろう！」と言って涙して終わるだけ。いえ、更に悪い事には、涙を流す事ですっきりとし満足するという事にもなりかねない。それでは人間に消費される「十字架演歌」であり、私たち人間を変える力はもち得ません。

11 甦りの主イエス・キリスト

主イエスは、私達の罪を背負い、私達人間が負うべき十字架の死を、徹底的な滅びを滅んでくださった、まことにまことに、人間の死、絶望的な死を、神の御子が、神と等しいお方が死んでくださった。だけれども、いや、だからこそ、この死が徹底的にすべての人間の死を負った神の御子の死であるからこそ、天のみ父は、主イエス・キリストを甦らせたのです、私達人間が永遠に神のものとして生きる為に、私たちを造り変え、あらたに創造された者とする為にです。この御子イエス・キリストの十字架と復活、徹底的な滅びと新たなる創造を示すために、私達の教会の十字架には、磔刑のイエス様のお姿はありませ

ん。御子が新しい命へと甦られ、今も生きて働いておられる事を示す十字架だから。

それが全く明らかとなるのは、私達が死ぬ時です。この肉体が寿命を迎える時。本当に恐ろしい滅びを既に御子イエス・キリストが既に代わりに負ってくださり、そして復活してくださったから、私達の死は滅びに続く死ではなく、甦りへの通過点である事をはっきりと知るのだと思います。そして、私たち人間が甦った時、私たちは神の子に変えられる…と聖書は語ります。父なる神と子なる神、霊なる神の交わりに、親しい愛の交わりに参加する事ができる命だと言われています。

しかし、甦りの命の恵みは死んでからでないと味わう事ができないわけではありません。地上で滅び行く肉体をまとい、様々な誘惑によって神を見失いがちな存在である現在でも、私たちは永遠の命の魁(さきがけ)を生きていくことができます。神の御子の霊、聖霊が与えられているからです。人の罪、自分の罪によって悩み苦しむ時、神を呼び求める、助けを求めて叫ぶ。そうして、御子イエス・キリストの死と甦りを示す御子の十字架の前に額づき祈る時、御子さえもお与えくださった神の愛が私達の心に注がれるからです。「私は自分の愛する子をあなたの代わりに滅ぼし、御子の甦りの命を約束するほどにあなたを愛している。今、この愛に生きよ！」という力強い声を聞くからです。御子の十字架のもとで神のみ前に神の愛に生きる道をまっすぐにされるのです。「主よ、恵みの御業のうちにわたしを導き、まっすぐにあなたの道を歩ませてください。」という旧約の詩人の祈りがかなえられて、この地上を生きることができるのです。自分を神とし生き、他者を憎み嫉んでいた者が、聖なる神の愛に生かされる者へと変えられます。溢れるほどの聖なる神の愛を知り、神を愛し人を愛し自分を愛する者へと変えられるのです。この喜びこそ、私達の肉体の死を超えても続く喜びです。今日から始まる一週間も、このとこしえの喜びを、横浜ナザレン教会に集められたお一人お一人と共に喜び楽しみ共に生きたいと祈り願います。